

□海外文献紹介□

内視鏡によるサーベイランスは潰瘍性大腸炎での癌死を減少させる

Colonoscopic surveillance reduces mortality from colorectal cancer in ulcerative colitis: *Choi PM, et al* (Gastroenterology 105: 418-424, 1993)

長期の潰瘍性大腸炎患者における大腸癌の早期発見のために大腸内視鏡検査による定期的観察が広く行われている。

著者らは、潰瘍性大腸炎における癌発見のための内視鏡検査の役割を評価するため経過観察結果を分析した。

潰瘍性大腸炎に合併した大腸癌 41 例中 19 例は大腸内視鏡によるサーベイランスで発見され、残りの 22 例は非サーベイランス群で診断

された。サーベイランス群の癌は Dukes のより早期のステージで発見された。死亡例は、サーベイランス群で 4 例、非サーベイランス群で 11 例であった。

5 年生存率をみると、サーベイランス群では 77.2%，非サーベイランス群で 36.3%と前者で明らかに高かった。

以上のことから内視鏡によるサーベイランスでは予後の良い癌を多く発見し、潰瘍性大腸炎合併大腸癌での死亡を明らかに減少させていると結論している。

【訳者コメント】 先に本誌の 3 月号に Linch らによる「潰瘍性大腸炎における内視鏡サーベイランスの失敗」という論文を紹介した。それによると、病歴 8 年以上の全大腸炎患者を 12 年にわたって年 1 回の内視

鏡サーベイランスを行ったが、結果は同期間に診断された潰瘍性大腸炎に合併した大腸癌 9 例中、サーベイランスで発見された癌は 1 例にすぎなかったことから内視鏡サーベイランスに否定的な結論を出した。一般的には内視鏡によるサーベイランスの効用を主張する論文が多い。母集団でのサーベイランスが徹底的に行われれば、本論文で述べているようにより早期の癌が多く発見されることは理解できる。しかし、現実には Linch が述べているようにサーベイランスが徹底しない悩みはわれわれも経験している。比較的若年層の患者が多いので、遠隔地への転居などで経過観察から脱落する例が意外に多いのである。

(愛知県がんセンター消化器内科

小林 世美 抄)